

巖本嘉志子の思想形成とその特色

武田京子

(岩手大学・教育)

1. 目的

巖本嘉志子(1864-1896)は、『女学雑誌』を活躍の基盤とした児童文学者若松賤子として著名であり、これまでの研究も文学的な側面からの研究に比重が置かれていた。嘉志子自身の意図したものは明治20年代に形成されつつあった中産階級の夫人だけでなく女子教育関係者に影響を与えようとするものであり、文学はあくまでも手段であると考えていた。嘉志子の思想は彼女自身の幼児期の実体験を土台に自己形成の過程の生活経験を取り入れ、さらに伴侶、巖本善治の思想の影響を受けて形成されたものであると考えられる。

本研究では、従来の若松賤子ではなく、教育者・家庭人、言い換えるならば実生活者としての巖本嘉志子に思想形成の過程を明確にし、特色を探ろうとするものである。

2. 研究方法

研究考察の主な資料として使用したものは『女学雑誌』, "The Japan Evangelist"に掲載された嘉志子の著作(エッセイ, 小説, 童話), 伝記である。

3. 結果及び考察(思想形成の過程)

(1)自己形成の基盤(1864-1870)

会津藩の隠密の長女として生まれた。1868年の戊辰戦争の際に、数え年4歳の嘉志子は母や祖母とともに籠城するはずがやむを得ずに城外へ逃れたのであった。わが国最初的女子留学生のひとりとして知られる山川捨松は籠城し、負けることを熟知した上ではあったが、一族郎党、目的を持って組織的に行動をしていたことを後年語っている。嘉志子は、身重の母と祖母との心細い逃走であり、「間に合わなかった」という敗北感を感じた。戦後も父の行方は知れず、母の死後一家は離散した。捨松は会津藩の斗南移封に伴い、父代わりの長兄を中心に家族と共に津軽へと向かった。嘉志子と同様に、口減らしのために函館へ養女に送られ、「一家離散」の状況にはあったが、各人の所在ははっきりしており、将来家族はまた集合できる見込みのある過渡期的な状況であった。

内海健寿氏は会津戦争の苦難と試練を体験した会津

士族の中から多くの優れた宗教教育家が誕生したことに着目し、山路愛山の言葉を借りて、「精神的革命は多くは時代の陰影より出づ」と述べている。嘉志子の思想形成の源には、会津戦争の生き残りの人たちに共通した影の部分に加え多くの生死を目の当たりにしたこと、自分自身の誕生の時、戦後の混乱期にも所在の明らかでない父親と母の死によって、家族にも見放されたという二重の負い目を持つことになったのである。

(2)自己形成(1870-1885)

嘉志子は横浜在住の生糸交易商人の大川甚兵衛の養女となり、当時の最新の教育の場であったキダーさんの学校(後のフェリス女学院)へ通うようになる。極貧の生活から正反対の経済的には恵まれた生活へ転換する。しかし、実子のない養母、血のつながらないきょうだいとの生活は、心をなごませるような暖かい生育環境と云うことはできなかった。大川家も勤め先の倒産のため江戸へ転居した。

3年後、嘉志子は寄宿施設の整ったフェリス女学院へもどった。嘉志子は形だけの家庭の葛藤から解放され、生まれて初めて「平和」を実感したが、同時に自分には帰る家のない寂しさを知った。寄宿生活は自己を見つめるスタートの場であったと同時に、「家庭(おや)」を考え初める契機となった。フェリスは嘉志子の唯一の家庭であり、「生徒を大家族」と呼ぶキダーは嘉志子の精神面での母親といえることができる。

(3)自我の確立(1885-1889)

卒業後、母校の和文教師として経済的にも自立した。名前の甲子を嘉志子(嘉之子)と改字したのは自己肯定の現れと見ることができる。実父の上京を契機に、父の隠密時代の姓、島田を名乗り復籍する。それまで存在の不明確であった父を肯定することにもつながる。しかし、一家の経済的な担い手は嘉志子のみであった。ミラー夫人の勤める縁談を自分の意志によって断るが、その直後に咯血する。嘉志子を精神的に支えたものは、中島夫妻や巖本善治との親交である。自分に面差しの似た教え子ちえの死と相前後した父の死は嘉志子に「少女時代の嘉志子は父とともに幸せな時を過ごしている」と感じさせることになった。

(4)結婚と家庭建設(1889-1896)

嘉志子は結核にかかっていた。休職はしたが周囲の

すすめもあって仕事は続けていた。海軍士官との縁談を破談にしたのは、自分だけが「玉の輿に乗るのを潔しとしない」という理由からであった。嘉志子に新たに家庭建設という生きる目標を与えたのが巖本善治である。外面的にとらえられる家柄格式よりも夫婦間の伴侶性を重視した結婚を理想としていた。夫となった善治は、幼いときに養子に出されるなど、嘉志子と同じ様な幼児体験を持っていた。

嘉志子は結婚と同時にフェリスの教育の現場から退職した。新居は東京の麹町となり、体力的に主婦と教師の両立は難しく、活躍の場を『女学雑誌』へと移した。単に主婦となって家庭の中に蟄居するのではなく、ホームの女主人として家庭を運営するのと同時に、家庭を拠点としてペンを執り、自己の実現を図ろうとしたのである。嘉志子は自分の考えを的確に表現する方法として、一時廃れていた言文一致体を用いるようになるが、嘉志子の内なる声を忠実に表現する方法として有効であった。家庭生活の実際は、どうであったのか。「雛嫁」の主人公に、新婚当時の嘉志子が重ね合わせている、といわれている。主人公は常識外れのチャイルド・ワイフで、家政には一切不向きであった。夫が道理を言って聞かせようとすれば、「理屈を言われにお嫁にきたのではない」と泣き出してしまうのである。後の『女学雑誌』掲載の実用記事の内容や、フェリスにおいて、「家事経済」を教えていた事実から考えて、家事能力が欠如していたのではなく、意識的に文筆活動を優先させたと考えて良いだろう。まず家事を滞りなく行ってから、自分のやりたいことをするのはない点を「雛嫁」的だと言うのだと考えられる。また、フェリスの教育から受け取ったものを、そのまま実生活の中で押し進めようとした自分の姿に、ドラの同じ姿を見いだしたと考えられる。結婚5年後、「女学生より主婦となりたる人の述懐」のなかで、自分自身の結婚生活の5年間を振り返っている。

理想の家庭は、子どもが誕生することによって完成する。「我等ただ二人なりしホームに先頃客人の来まして、始めてまことの家族を作しつるなり。」と記すように、子どもの誕生は嘉志子に理想の家庭が着実に建設されていくことを実感させた。自分自身の家庭が母胎となり、そこでペンを執り作品を生み出していくことが、やがて社会の浄化につながると考えていた。

嘉志子が「小公子」の連載を始めた明治23年は、わが国最初の近代民主主義革命運動である自由民権運動が大日本帝国憲法の発布後終結し、女子教育や婦人に関する活動も文明開化期に比べ下火になっていた。

しかし、女子啓蒙を目的に発刊された『女学雑誌』では、女子に関する教育を含めた関心は健在であって、「小公子」は読者である母親から大歓迎され、明治から大正にかけて「家庭小説」として大流行した。

嘉志子は「子ども」という存在に対して従来とは違った見方をしていった。「子どもの権利の保護」「家庭教育の重視」である。また、自分自身の経験から、「たとえ不毛な子ども時代を送ったとしても、それ以降の対応の仕方によって、子どもの傷は癒されるということ」を強調し、女子教育重視から家庭教育重視へと方向を転回する。自分の幼少時の体験から、誰よりも増して母の手によって育てられる子どもが幸福である事を強調し、その躰方も、行儀作法など是大目に見て、従来の厳格な鋳型に無理矢理に押し込めるようなものではなく、子どもの自由な意思を尊重することを良しとした。

嘉志子の死を視野に入れての家庭建設において、子どもの誕生は喜ばしいものであると同時に不安でもあった。さらに外部援助を受けない明治女学校と女学雑誌社の経営は困難を究め、不安を大きくした。

"The Japan Evangelist"の婦人欄と子ども欄の編集と執筆を担当し、活動の場の移行は、経済的援助であり、自分自身を客観的に見直す機会をも与えた。

4人目の子どもの妊娠によって、胎児の生命によって自分が生かされていると感じ、「自分自身が神に召され、絶対者との霊的な交流を切望し、個々の新生・再生を通して初めてキリスト教における無私を確立できる」ことを心の拠り所として、死を迎えることになる。夫善治も同様にキリスト教に依る不滅の生命を確信し嘉志子をささえた。死を予期しながら文筆と家政は嘉志子の人生の基盤であり、「家庭(お-ん)」を素材にした作品を残している。

4. 結論(思想の特色)

巖本嘉志子の思想は会津戦争の敗者としての記憶と文明開化期の日本で米国の先進的な教育を基盤とし、暖かい家庭への憧れによって培われ、キリスト教と女子啓蒙教育の推進者である夫によって強化された。中でも「個」を尊重する態度は当時の日本人女性の中では注目すべきことである。しかし、健康上の理由と社会の状況によって、彼女の個性は十分に生かし切れることは出来なかった。嘉志子の思想の継承は、自分自身が女性であることを自覚し、社会における一個人として社会と女性、子どもと母親の問題を論ずる「新しい女性」達の出現まで時を待たねばならなかった。